

久生十蘭全集

I



久生十蘭全集 I

編集委員 大佛次郎 荒 正人
安部公房 中井英夫

三一書房

久生十蘭全集 I

一九六九年十一月三十日 第一版第一刷発行
一九七四年四月三十日 第一版第二刷発行

編者 大佛次郎・荒 正人・安部公房・中井英夫

© 久生幸子 一九六九年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三一三一〜五番
振替東京八四一六〇番
郵便番号一〇一

印刷 文栄印刷株式会社 製本 株式会社鈴木製本所

(第一回配本)

目次

黒い手帳	5
海豹島	23
地底獣国	45
ハムレット	85
鈴木主水	113
母子像	125
魔都(長篇推理)	133
解説 荒 正人	407

久生十蘭全集

I

黒い手帳

黒いモロッコ皮の表紙をつけた一冊の手帳が薄命なように机の上に載っている。一輪挿しの水仙がその上に影を落している。一見、変哲もないこの古手帳の中には、ある男の不敵な研究の全過程が書きつけられてある。それはほとんど象徴的ともいえるほどの富を彼にもたらすはずであったが、その男は一昨日舗石を血に染めて窮迫と孤独のうちに一生を終えた。

この手帳を手に入れるためにある夫婦が人相の変るほど焦慮していた。けっきょく望みをとげることが出来ず、恨をのんで北のほうへ旅立つて行った。そしていい加減なめぐり合せで、望んでもいない自分が、遺品といった意味合いでうやむやのうちに受取るような羽目になった。運命とは元来かくのごとく不器用なものであろう。

今朝着くはずであった資料の行李は事故のために明日まで到着せぬことになった。焦だたい時間まぎらわすた

めにこの黒い手帳をめぐって起った出来事ありのままに書いて見ようと思う。彼とある夫婦の間の微妙なもつれについてである。

当時、彼は六階の屋根裏に、夫婦は四階に自分は中間の五階に住んでいた。この二組の生活を観察しようと思うなら同じ数だけ階段を昇降するだけでよかった。自分は階下で夫婦と談話し、すぐその足で六階の彼のところへ上ってゆく。互いに関知せず、そのくせ微妙に影響し合う興味深い二つの生活を自分は両方からあますところなくながめていたのである。

自分は文学者ではないから面白いようにも読みやすいようにも書くことは出来ぬ。が、ものを見る眼だけはいして誤らぬと信じる。自分は見たままに書く。これを書く動機は充分にあるのだが、それまでうちあける気はない。懺悔のためとも感傷のためとも、勝手にかんがえてくれるらしい。

一、この年の中頃から為替は不幸な偏倚をつづけていた。三月目にはむかしの半分に、半年の終りには約三分の一になつてしまった。留学にたいする自分の年金は一定の額に釘付けされているので、研究に必要な所定の年月だけパリに止まるためには為替の率に依じて生活を下落させてゆかねばならぬ。そういう理由によって半年の間に三度移転した。一度毎に趣味が悪くなった。三度目のこの宿はこれに

上臈くては人間として面目を保つことは出来まいと思われ
るほどのものだった。

手すりのかわりに索をとりつけた穴だらけの暗い峻しい
階段を非常な危険をおかしてのぼってゆく。五階のつつ
きに、その部屋があった。鉄棒をはめた小窓がひとつ。瓦
敷の床、むきだしの壁には二三日前の雨じめりがしっとり
としみ透って、ところどころに露の玉をきらめかせている。
これを人間に貸そうというのである。着想のすばらしさに
感動してその部屋を借りることにした。為替の下落もよも
やここまで追いつくまい。とすると当分移転のめんどろ
だけははぶけるからである。

寝台に腰をおろしてなすこともなく腕をこまぬいでいる
と、扉を叩いて、びっくりした子供のような一種不可解な
顔をした男がはいってきた。髪は遠慮なく薄くなりかけて
いるが、顔のほうは二十一、二歳でハタと発達をとめたも
のとみえる。

自分の部屋を訪れるために無理に上衣の釦をかけてきた
のだろう。その釦を飛ばすまいとして一生懸命に下つ腹を
凹ましているふうだった。通例の挨拶の後、舌つたらずな
口調で「わたしはこの階下に住んでいるものです。お差支
えなかったら、おちかづきのしるしに晚餐をさしあげた
い」といひ「なにしろ今日は、降誕祭前夜のことだから、
ひとりで夜食をなさるのは、さぞ味気ないだろう。それ
に、妻も非常に希望しているから」という意味のことをき

わめてばんやりとつけくわえた。

一、夫婦の部屋は貧困なりにやはり家庭だとうなずかせ
る和やかな雰囲気があった。その中にたいへん小柄な女が
立っていた。これが妻君だった。前髪を眉の上で切り揃え
て、支那の女のようにしている。二十四五歳であろうか。
どんな男をもどきりとさせずにおかぬような煽情的な眼付
で手を握ると、「ようこそ」といった、それが自分には、
「welcome (汝を愛す)」といわれたような気がした。そんな
錯覚を起させる過度なものが、たしかに抑揚の中に含まれ
ていた。

この夫婦はアメリカの生れのいわゆる第二世同志で、夫
のほうは声楽を妻君のほうはピアノの勉強をしているとい
うことだった。

食事と身上話がすむとお定まりのアルバムが出てきた。
いずれの前例に劣らず退屈千万なものだった。その中に博
徒のような無惨な人相をした角刈の男の写真があった。自
分は興味を感じ、親族かとたずねると、それは布哇の大漁
場主で赤の他人なのだが、二人の勉強ぶりに感激して義侠
的に三年の巴里遊学の費用をひきうけてくれ、いまここで
勉強しているのはこのひとの後援によるものだといった。

部屋へ帰ろうとしてたちあがると、そのとき窓にそって
はるか階上から盛んに落下する物音をきいた。尿の音にち
がいがなかった。自分はある爽快さを感じ、どんな奴の仕業
かと、たずねると、あなたのすぐ上にいる日本人がやるん

です。もとは画かきだったということですが、毎日部屋に
とじこもってなにか計算ばかりしているんだそうです。こ
の宿にはもう十年以上もいるとききましたといった。

一、一月一日の朝のことである。上の部屋で傍若無人に
飛びはねる粗暴な物音で眼をさました。いったい上の部屋
の住人はこれまでも夜つびで部屋を歩きまわったり、けた
たましく椅子を倒したりして悩ましたが、この朝の騒ぎは
じつに馬鹿馬鹿しいもので、そのために天井の壁土が剝離
してさかんに顔のうえに落ちてくる。これは我慢がなりか
ねた。

無言で扉をおしあけると、眼の前にいささか常軌を逸し
た光景が展開した。広い部屋の床全面に約二尺ほどの高さ
におどろくべき量の紙屑が堆積し、壁にはいたるところに
数字と公式が落書きしてあった。床の上で自在に用便する
とみえ、こんもりと盛りあがった固形物が紙屑のあいだに隠
見していた。

長椅子の上には、極めて瘦身の四十歳位と思われる半白
の人物がいて、敵意に満ちた眼で自分を凝視していた。そ
れは何千人に一人というような個性的な顔で、額は異様に
広く顎は翼のようにつよく張りだし、房のような眉の下に
は炎をあげているような強烈な眼があった。

彼は無断侵入が真に憤懣に耐えぬようすで「貴様なん
だ」と叱咤した。自分はほとんど眼も口もあけられぬ異様
な悪臭に辟易し「臭くてこれじゃ話もなにもできぬ。いま

窓を開けてから話す」と答えながら斜面の天井についてい
る窓をおし開けた。

「天井の壁が落ちてきて物騒でしようがない。暴れるのも
いい加減にしておけ」彼は急にうちとけた口調になって
「じつはナ、今日うれしいことがあつてだれかと喋りたく
てしようがなかったところなんだ。おれが騒いだために貴
様がやつてきたというのは、こりやなかなか運命的な話だ
ぞ……争われないもんだ。貴様があんな口調でものをいっ
たのがおれの感情にピツタリした。忙しくなかったらしば
らくそこへ掛けて行つてくれ。実はナおれの研究はまさに
完成するところなんだ。間もなくおれは無限の財産を手
に入れることになるんだ。無限だ。無限、無限！ 突飛にき
こえるだろうが、おれは狂人じゃないよ。おれはねこの十
年の間ルウレットの研究をしていた。屑箱の中の屑のよう
なものを喰つて、寝る目も寝ずに計算ばかりしてたんだ。

いったい丁半に法則がないというのが定説だ。早い話がポ
アンカレとかブルヌイユなんていうソルボンヌの大数学者
が精密な計算を例にひいて証明している。たとえば奇偶の
遊びで、いま出た目とそのあとの目というものはそのたび
に永久に新規だという。これがかれらの学説なんだ。よろ
しい……ところがわれわれは千回骰子を振るといつも半々
位の割合で奇偶が出ることをしている。もし目がいつも
新しいものなら、もし奇偶に法則がないものなら、なぜ奇
数ばかり、あるいは偶数許り千回つづけて出るような出鱈

目なことがないのだから。それは不可能じゃない、と数学者はいうだろう。それア不可能じゃない」といいながら壁に書きつけた公式を指さした。「君はどういう研究を専門にやっているひとなのだね？ あ、の公式の意味がわかるひとなのかね？」

壁の上にはこんな公式があった。

$$n = \frac{37r+2}{18r+31} + r - 2$$

めんどろくさくなくなったので、判らぬとこたえた。

「この公式はナ、たとえばルウレットの赤・黒の遊びで、赤だけがつづけて百回出るようなことは、一世紀にたった一回しかないということを証明しているのだ。なにかしらの法則に支配されていて、けっして出鱈目なものでないことがわかるだろう。それどころか研究してみると、目の出かたはじつは秩序立った法則があることが判然する。ただしこの法則を発見するには、五十万以上の組合せと同じ数だけの順列と取っ組まなくてはならん……五十万！どんな困難な仕事か君には想像も出来んだろう。おれは五年でやってのけるつもりでいたが、休みなしにやって十年もかかってしまった。そしておれはとうとうそれを発見したんだ。もう九分九厘というところまで行っている」そういうとふところから黒い手帳をとり出して頭の上でふりまわしながら「その公式はこの中にある。おれにとつてルウレットはもはや僥倖を期待するあさはかな賭博ではない。お

れにとつてそれは組合せと順列の簡単な遊戲にすぎない。百万法を勝つのはわずか半日の暇つぶしですむのだ……どうだ無限の富を握るといったわけがわかったらう。……賭博の研究に十年も寝る目も寝なかったといったらひとは笑うだろうが、これは卑劣な利慾心だけではじめた仕事じゃない。じつさいのところ選り好みしようにもほかにどんな金儲けの能力も持ってなかったからなんだ……おれはこれでも絵かきだったんだぜ。十七の年から十五年の間、不逞の精進をした。そして十年前に巴里へやってきた。胸をおどらせてルクヴル博物館へ飛んで行った。無数の傑作をながめておれは茫然自失した。やがて自分にいきかせたね。これだけ優れた絵がたくさんあるのに、まだ自分の出場があると思うか……おれはその日から絵筆を折った。才能もないくせに絵の勉強などをはじめ、ろくに楽しい思いもせずに空費した青春のことを考えると、五十になつてようやく十万円貯めたなんていうしみたれた儲けかたでは我慢がならなかったんだ」

賭博の絶対的な法則などはない。虚在の対象を追求して十年の歳月を空費した愚かな執着のすがたをあわれ深くながめた。

一、次の日から部屋に籠って勉強をはじめ、一週間ほど多忙な日を送っていたので、どちらの部屋もおとずれる機会がなかった。仕事が一と区切りついたので、その夕方、夫婦のいる四階へおりて行くと、夫婦は長椅子に並んで掛

けていたが、夫のほうは放心したような中心のない顔をし、妻君のほうはせっかくの魅力のある眼を赤く泣き腫らしていた。

聞いてみると、二人はその朝不幸な手紙を受取ったのである。布哇のれいの後援者の漁場が大海嘯にやられ、一夜にして彼自身も無一文になってしまった。不本意ながら、援助が出来なくなったといってきた。寝耳に水とは真にこのことだ。ちょうど半年分の送金が届く定例の月で、それを待ちかねていたくらいだから手元には千法とちょっとしか残っていない。どんなに儉約したって二ヶ月ともちはしない。するとそのあとはどうなるだろう。

「夫は歌をうたうほかなにひとつ出来ない能なしだし、あたしはミシンもタイプライターもだめなんです。パパがいやしい仕事だといってやらしてくれなかったのよ。アメリカならどうにかなるでしょうが、こんなせち辛い巴里じゃ日本人の働く口なんか、あるわけはないんだし、友達はみんなじぶんのことで精一杯で、他人のことなんかにかまっていられない、貧乏なひとたちばかりなんだから、いずれは餓死するか自殺するか、あたしたちの運命はもうきまつたようなもんですわ」

いかにもしんみりと口説くと、同情を強要するような一種雅致のある泣きかたをしてみせた。つまるところは助けてくれというわけなのであるが、こちらにはそんな気がない。聞くだけ聞いてひき退ってきた。

一、それからまた三日ほどしてから、なにかの用事で夫婦のところへ行くと、發育不良の子供面が待ちかまえてでもいたようにいそいそと椅子から立ってきた。

「喜んでください。ぼくたちは餓死しないでもすみそうですよ。いやひょっとすると大金持になるかも知れないんです。まアこれを読んでごらんなさい」

いわば、喜色満面といった風情で、前日の夕刊をさしつけてよこした。なんにしても結構な話にちがいないから、それはよかったといいながら、指されたところを読んでみると「モンテカルロの大勝」という標題の下に、ウィンナムという英国の婦人が一夜のうちに二十万法勝ちあげ、モンテ・カルロ海濱俱樂部がその婦人に祝品を贈呈したとか贈呈するところだとか、そういうた埒もない記事が載っていた。

夫のほうは悪いロググでも飲みすぎたようなしどろもどろの口調で「どうです。凄いいじゃありませんか。一と晩に二十万法！　ともかく最近モンテ・カルロはつづげざまにやられているんですよ。先週も三人組の独逸人に百万法近くやられて、三日の期限付でモナコ公国にモラトリウムが出たばかりのところなんです。それでぼくはちょっとしたシステムを知っているから、最後の千法を賭金にして一と旗あげてみるつもりなんです。万一、負けたって自殺することにかわりはありやしない。次第によっては、まるっきり運命を変えることが出来るんだから」

額際まで赤くなつて熱狂しながら、机の上に置いてあった、れいの緑色の賭博場の週報、全紙数字ばかり羅列したモンテ・カルロ新聞 *La Revue de Monte-Carlo* の最初の頁を指さし「一昨日、モンテ・カルロの No.2 の卓で朝の八時から夜の十二時までの間に、こんな順序で数字が出たんです。家内にこれを読ませて朝からシステムの実験をしているんですが、場で出た目のとおりなんだからモンテ・カルロのカジノでやっているとかわりはないんです。だいたい成績ですよ。五法賭けで小さくやっていますんですが、あらかた千法以上勝った計算になっています。わかりますか。五法でやって千法！ 百法でやっていたら二万法、もし千法でやっていたら二十万勝っている理窟なんです。いま実験してお目にかけますから見ていてください。さアいまのつづきをやろう」と細君にいうと勿体ぶつたようにすで机の前に坐りなおした。

細君は心得た顔でモンテ・カルロ新聞をとりあげると、滑稽とも悲惨ともいいような真面目くさつたようすで斜にかまえ、賭博場の玉廻しそっくりの声色で「みなさん、張り方をねがいましょう」のアンONSEI、無智と卑しさを底の底までさらけだしたギスばった調子で、「三十五……黒……奇数……後目……」などと一週間も前に出たモンテ・カルロのルウレットの出目を読みあげていたが、頃合のところどおりに「張り方それまで」と声をかけた。夫のほうは眼玉を釣りあげてギョギョロしていたが、

首だけこちらへねじむけて「ごらんない。赤が十回もつづけて出ている。こんなことであるもんじやない。こんどは黒に崩れるにきまつています」と説明すると「黒へ五百法！」と叫び、賭けたしるしにノートへ *2—500* と書きつけた。

赤が出た。

「赤が出たらどこまでも赤に乗って行く約束だったじゃありませんか。勝手にシステムを変えるからいけないんです」と細君がやりこめた。夫のほうは見るとみじめに狼狽して「システムといったって博奕のことなんだから百パーセントに正確なもんじやない。これは負ける回数をうんと少くして出来るだけ勝つ回数を多くしてその差で自然に儲けるようになっていいるシステムなんだから、一回や二回負けたいしたことはないさ。もっともいまは勝手にシステムを変えたからいけないさ。きめたシステム通り赤へ乗ってゆく。こんどは大丈夫……赤へ五百法」

黒が出た。自分は見かねて、六階にいる男もじつはルウレットの研究をしているのだが、十年もやってようやくものになりかけているそうだという話をした。それほど研究してもかならず勝てるとはきまつていぬというのに、こんなにあやふやな思いつきでルウレットにたちむかうなんて愚劣なことはよしたがよからうとたしなめたつもりだったが、二人にはこれがまるで通じぬらしく、たちまちはげしい渴望の色をあらわしてぜひそいつを教えてもらうことに

しようといひだした。自分は「十年もかかって研究したものをそうかたんに教えてくれるはずはなからう」と苦い調子でいうと、夫は「ええ、ですからただ教えてもらうんじゃない。ぼくのシステムをむこうへ公開するんだからつまり交換教授です。これなら先生もまさかいやとはいわないでしょう」

そして夕食に招くという名目で、うまくつれだしてほしいとたのんだ。自分は事を好むほど若くはないつもりだが夫婦の厚顔しさがひどく癪にさわり、無理にも六階の住人を引っぱってきて、こっぴどくとちめてやりたくなった。一、彼は長椅子に寝ころがって煙草をふかしていた。部屋の紙屑は残らず消え、意外に清潔なようすになっていた。机の上にも埃がたまつていてしばらくそこに倚らなかつたことを示していた。

彼は元氣よくはね起きて「おれが逢いたいと思つてるとかならず貴様がのこのこやつてくる。おれと貴様の間には感応し合う電氣のようなものがあるのかも知れぬな」といった。「じつはお前を晩飯に誘おうと思つてやつてきたのだ。もつとも二人きりじゃない四階の夫婦もまじるのだが」案の定彼はうんとはいわなかつた。女は苦手だとか、おれはもう社交の習慣を忘れてしまつたとか、いろいろな口実を設けて頑強に反抗した。自分はそこで「バタを載つた炙牛肉と鰻と、生牡蠣と鶏と……これだけのご馳走が前のために用意してあるのだ」といつてそれらの料理につ

いて精細な描写をした。

彼は頭を抱えて呻いていたが「貴様はひとの弱点をつくようなことをする。貴様の策略にのるのは忌々しくてたまらんが、抵抗は出来ん。よし行く」といつてたちあがつた。彼の貪食ぶりは言語に絶した壯観で、挑みかかるようにありつたものの喰いつくすと、喉を鳴らして遠慮なく嘔氣をした。食事がすむとすぐ、亭主のほうで、自分は最近すばらしいルウレットのシステムを発見したが、座興までここで実験して見る。お望みなら公開してもいいといつて素早く机の上にノートをひろげた。彼はたちまち嫌惡の色をあらわし、険しい眼つきでこちらへふりかへつた。彼は何もかも察したらしかつたが、それについては一言もいわなかつた。

例の通り細君が玉廻しになり亭主が賭り方へまわつた。

この日ははじめからだいぶ調子がよくて二十分ほどのあいだにかなりの額を勝ちつづけた。彼は頬杖をついて黙然とながめていたが、やがてとつぜん「たわけたことを！ そんなのがシステムであつてたまるものか」と叱咤した。子供面はむきになつてノートをふりまわしながら「現にこの通り勝っているじゃないか」と叫んだ。彼は「勝っていることも事実だが、いづれ負けてしまうのも事実だ。お前の様な馬鹿野郎を納得させるには理窟では駄目なのだナ。いま実例を示してやる。おれが読むからやつてみる」といつてモンテ・カルロ新聞をとりあげた。珍妙なことがはじ

まった。黒へ賭れば赤が出る。奇数へ賭れば偶数が出る。面白いほどいちいち反対の目が出た。それは、涯しない。黽ごっこだった。亭主は躍起となって賭りつづけたが、間もなく仮想の全財産を失ってしおしおと賭博台を離れた。

「どうだ。おれは目を三つおきに読んだだけだが、こんなことで屁古たれるようなものはシステムでもなんでもありはしないのだ。お前の馬鹿をここでわからしてもらったことを有難くおもえ、賭博場で自分の馬鹿がわかったと来ちゃ首を縊らなけりやならんのだ。こんなものがシステムだなんて出かけて行ったら、モナコ三界で路頭に迷うぞ、及びもつかぬことを考えぬがいい」それ自身貧困である歐羅巴では、なんの生活力もたぬ孤立無援のこの東洋人夫婦にとって、このような場合窮死は空想ではなく、極めてあり得べき事実なのである。この能なしの夫婦にとって賭博だけが最後の希望だった。彼等は悲運から救ってくれるはずだった唯一の希望があとかたもなくケン飛んでしまった。この打撃はどんなにひどいものだったか夫婦は虚脱したように椅子の中へめりこんでしまった。その絶望のさまはみるも無残なくらいだった。

彼はまじまじと夫婦のようすをながめていたが懷中から黒い表紙の手帳をとりだすと、数字のギッシリとつまった頁をペラペラとはぐって見せながら「システムなんてものは無限大の数字を克服してはじめて獲得出来るようなものなんだ。おれは十年やった。しかしそのおれでさえまだい

っこうにわからん。君等はおれがかならず勝つと思っているかね？ そんなことはあり得ないのだ。ルウレットというのはどれほどむずかしいものかその証拠をみせてやろう」そういうと妻君に「モンテ・カルロ新聞のどこからでもいいから、勝手に読んで見たまえ」といつけた。

彼は妻君が読みあげるのを頬杖をついてきていたが、やがて無造作に「黒へ最高賭額（一万二千法）！」といった。

黒が出た。また黒へ賭けた。黒が出た。次は赤へ賭けた。赤が出た。たった三回で（資本の一万二千法を差引いて）五万法も勝ってしまった。彼は無頓着なようすで黒へ二度、赤へ二度、黒へ一度、赤へ三度……それからまた前へ戻って、黒へ二度、赤へ二度というぐあいに最高額を賭りつづけていた。

ふしぎな現象がおきていた。われわれは遅まき乍ら、ルウレットがいま黒と赤と交互に（黒2回—赤2回—黒1回—赤3回）（2—2—1—3）という秩序立ったアッパリションを飽くことなく繰り返していることを発見した。

この単純極まる反覆を十回もつづけた後、ルウレットは別な配列へ移っていた。今度は（赤1回—黒1回—赤1回—黒2回）……また始めへ戻って（1—1—1—2）という反覆運動だった。彼は機械的にそれに追従していたが、一時間のち、ただの一度の失敗もなしに八十万法勝ちあげてしまった。これは仮想の賭博にすぎぬが、われわれはうず高い金貨の山と、膨大な銀行券の束をありありと机の

上にながめる思いだった。

夫婦は酔ったような赤い顔をし、はげしい渴望の色をあらわしながら荒い息づかいをしていたが、細君がだしぬけに床に土下座をして彼の手をとった。

「助けて、ください」哀切きわまる眼つきで彼を見あげながら「どうぞ……そのシステム……」といった。

彼は守銭奴がその宝を隠すときのようにあわてふためいて手帳を内懐へおしこむと、悲哀とも憤怒ともつかぬ調子で「賭博に、システムはない」と叫んだ。そして荒々しく戸をあけて出ていった。

一、それから二日ばかりのち、自分はまた夫婦の部屋をおとずれた。自分が入ってゆくと夫は急に夕刊を取りあげて、いまタルジュ事件について論じていたところだったといった。夫婦はたった二日のうちにひどく憔悴してしまい、眼のまわりに黒い輪のようなものが出来ていた。眼の中には刺すような光があらわれ、声には陰惨な調子がいり、誇張していえば人相が変わってしまったといってもいいほどだった。

タルジュ事件というのは、妻君が荏若^{ちやうじやく}の煎汁を飲ませて夫を殺したつい最近の事件であった。病中の躁暴^{そうぼう}状態が異様だったことを女中が近所にいふらしたので発覚した。

かなり夜が更けてから部屋へ帰ろうと、たちあがるとピアノの上に一冊の見なれぬ本が載っていた。なに気なく手にとって見ると、「摘要毒物学」R. A. Wirtzhaus, Manual

of Toxicology という標題がついている。奇異に感じて思わず夫婦のほうへふりかえると、妻君が、私は以前探偵小説を書いたことがある。さいわい「探偵」^{たんてい}という雑誌の編輯者と懇意であるから、またそれをはじめて生活の足しにするつもりだ。そのためにいま速成の勉強をしているのだという意味のことを沈着な口調で説明した。

一、帰るとすぐ寢床へはいったが、夫婦が殺人を企てているのではなかるうかという疑念のためにどうしても眠りにつけぬのであった。強いて頭を転じようとしたが、どうしても、どういふ動機によって疑念をおこすにいたったか考えて見ることにした。

第一は夫婦の部屋にはいつて行ったときの印象である。自分が入って行くと、いまタルジュ事件について話していたところだったといった。しかしその時の実感によれば、明らかにそれ以外の非常に陰悪ななにか犯罪に類したことを話しあっていたのではなかったかというような気がした。

第二はタルジュ事件に対する夫婦の興味のもちかたである。普通にわれわれがもつ社会的な興味の度を越えた異常な熱心をあらわし、しかも話題の中心は毒殺とかというところにあった。第三は毒物学の本である。自分がこれを取りあげたとき、夫の眼にはあきらかに狼狼の色がうかんだ。しかるに妻君はそれがこの場所にあるゆえんを沈着に釈義した。それはあまりに沈着すぎるためにかえって相手に疑念を抱かせるような種類の沈着で、妻君の意志を裏切って

その説明が虚偽であることを明白に申し立てていた。するとあの毒物学の本はどういう目的のため購求されたのである？ 人間の頭の發展の仕方にも幾通りも特別なスタイルがあるものではない。悲境を打開する方法を勤勉に求めずに賭博に求めるような困憊した性格においては、渴望するものを手に入れる方法として容易に殺人を思いつくであらう。

さてここまで考え来たところ、また新たな想念に煩わされることになった。それは一種異様なもので、われながら不快を感じたのであるが、そのアイデアとは、殺人を遂行するまでの経過を冷静に観察して見たいというそれであった。いま一人の人間を殺そうとしてある人間が計画をたてている。それは細心に考案され、徐々に対象の命に迫ってゆく。さまざまな曲折を経たのち、それは成功する（或いは失敗する）。いま自分の眼前で謀殺の全過程と全段階が展開されようとしている。人間が徐々に殺されてゆく経過をこの眼で見るなどは、千載一遇の機会であらねばならぬ。しかも殺人と被殺人者の両方の面からこれをながめ、「運命」の操り手を楽屋から見物し、運命のやり方というものをも仔細に観察することが出来る。しかし自分は悖徳者ではないから、殺人に加担するのではない。あくまでも觀察にとどめるのは無論である。殺人者に対していかなる誘導もいかなる示唆も与えず被殺人者にたいしてはいかなる同情も憐憫も感じない冷酷な心を用意しておかねばならぬ。

殺人者を嫌悪せず、被殺人者を嘲笑せぬ公平な心が必要である。自分は出来るだけ冷静に觀察するつもりであるが、かならずしも殺人の成功を望んでいるのではない、結果はどうあらうと教訓になる。

よりよく觀察するためには両者にもっと接近しなくてはならぬ。彼のほうはいいとしても、夫婦のほうへ毎日出掛けていく口実がない。しかしこんなぐあいには出来る。不便だという名目で夕食の世話をして貰う。相当以上の費用を払ったら承諾するにちがいない。

さいわい自分の放心ぶりは彼等に愚直凡庸な人物であるかのような印象を与えているから、彼等に気兼ねなく振舞わせることが出来るであらうと思う。

觀念内の遊戯として弄ぶぶんには一向無難であるが、実行に移した場合のことをかんがえると倫理感情は一種不快な圧迫を受ける。殺人にたいして、いかなる積極的な意味においても共犯以外のなものでもないからである。

一、翌朝になっても觀念にたいする熱望は一向に薄らいでいない。自分は階下において夕食の件を依頼した。案の定妻君は快諾した。殺人計画の進行を仔細に知るためには對抗上、毒物学の知識が必要であるとかんがえ、その足で図書館に行き、妻君の手元にある、

Withaus, Manual of Toxicology, Kunhel, Handbuch der Toxilogie, その他二冊を借りだした。

一、一月十三日、いよいよ今日から觀察を開始すること